文化的自己観，アレキシサイミア，身体感覚/感情の弁別的明瞭性の関係

○金井雅仁¹ 湯川進太郎²

(筑波大学大学院人間総合科学研究科¹ 筑波大学人間系²)

Key words: cultural self-construal, alexithymia, bodily sensation

目 的

感情同定における困難は，アレキシサイミアという心理的特性の一側面として概念化されている。このアレキシサイミアには文化差が存在し，東洋文化圏の人々は西洋文化圏の人々よりもアレキシサイミアが高いことが報告されている(e.g., Dere, Falk, & Ryder, 2012)。さらに，Konrath, Grynberg, Corneille, Hamming, & Luminet (2011)は，文化的自己観がアレキシサイミアと関連することを示している。文化的自己観とは，ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提のことであり(北山, 1994)，西洋文化で優勢な相互独立的自己観(相互独立性)と，東洋文化で優勢な相互協調的自己観(相互協調性)から成り立つ。

しかし，Konrath et al. (2011)には，論文内の複数の研究の結果が一貫していないという問題点がある。具体的には，調査協力者の大半が西洋人であった場合は，相互独立的自己観とアレキシサイミアの一側面である外的志向との間に有意な相関が見られなかったが，調査協力者における東洋人の割合が増えた場合には，両変数間に有意な負の相関が見られた。以上より，研究対象者の文化的背景が異なると，文化的自己観とアレキシサイミアの関係が異なる可能性が考えられる。

そこで，本研究では，質問紙調査により，日本人において文化的自己観とアレキシサイミアがどのように関連するか，文化的自己観がどのような過程を経て感情報告の明瞭性に影響するかを検討する。なお，Konrath et al. (2011)においても，調査協力者の文化的背景を統計的に統制した分析が行われたが，そこでは相互独立的自己観と相互協調的自己観の差が変数として使用されていたため，本研究では，2つの文化的自己観をそれぞれ個別の変数として扱う。

方 法

■参加者： 関東地方の大学生 319 名(男性 192 名，女性 121 名，性別不明 6 名，平均年齢 19.13±1.44 歳)であった。

■測定指標：

感情・身体感覚 International Affective Picture System (Lang, Bradley, & Cuthbert, 2008)から選定した3枚のネガティブ感情喚起画像(No. 1930, No. 2053, No. 9290)を質問紙に記載し，画像を見て感じた感情と身体感覚に関して回答を求めた。なお，画像の順番はカウンターバランスをとった。感情に関しては，画像を見た時に感じた感情が，驚き，恐怖，嫌悪，怒り，悲しみの5つの感情にどの程度当てはまるかを回答させた。身体感覚に関しては，画像を見た時に感じた身体感覚が，Scherer & Wallbott (1994)を参考に作成した7つの身体感覚に関する項目(のどが詰まった，呼吸が変化した，腹部に違和感を感じた，寒気を感じた，心臓の鼓動が早くなった，筋肉が緊張した，手に汗をかいた)にどの程度当てはまるかを回答させた。どちらも回答は1(全く当てはまらない)～6(非常によく当てはまる)の6件法であった。

文化的自己観 相互独立性・相互協調性尺度(内田, 2008)の日本語版項目(20項目，5件法)を用いた。本尺度は，相互独立性に関する10項目と，相互協調性に関する10項目から構成される。

アレキシサイミア 日本語版 The 20-item Toronto

Alexithymia Scale(小牧・前田・有村・中田・篠田・緒方・志村・川村・久保, 2003)(20項目，5件法)を用いた。本尺度は，感情同定困難に関する7項目，感情伝達困難に関する5項目，外的志向に関する8項目から構成される。

結 果

■変数の作成： 分析に当たって，新しい変数を2つ作成した。まず，感情に関する5項目それぞれについて，3つの画像呈示後の評定値を平均した。次に，各項目の評定得点と理論的中央値である3.5との差を絶対値に変換した。こうして得られた5つの絶対値を5項目で平均した値を，感情の弁別的明瞭性とした。また，身体感覚に関する7項目についても同様の手続きで新しい変数を作成し，身体感覚の弁別的明瞭性とした。

■仮説モデルの検討： 2種類の文化的自己観がアレキシサイミアと関連し，アレキシサイミアが身体感覚の弁別的明瞭性と関連し，身体感覚の弁別的明瞭性が感情の弁別的明瞭性と関連するという仮説モデルを検証した。最尤法による構造方程式モデリングを行ったところ，仮説モデルはデータに十分に適合することが示された($\chi^2(9)=8.27$ (n.s.), GFI=.99, AGFI=.98, CFI=1.00, RMSEA=.00)(図1)。まず，相互独立性は感情伝達困難，外的志向と有意な負の関連を示した。一方，相互協調性は感情同定困難，感情伝達困難と有意な正の関連を示した。また，アレキシサイミアの3側面のうち感情同定困難のみが身体感覚の弁別的明瞭性と負の関連を示し，身体感覚の弁別的明瞭性が感情の弁別的明瞭性と正の関連を示した。

図1 仮説モデルの検証結果。

数値は非標準化偏回帰係数と相関係数を表す。感情同定困難と感情伝達困難は相関することが示されているため(小牧ら, 2003)，誤差変数 e1 と誤差変数 e2 の間に相関を仮定した。

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$.

考 察

分析結果より，日本人においては，相互独立性は感情伝達困難および外的志向と関連し，相互協調性は感情同定困難，感情伝達困難と関連することが明らかとなった。また，日本人においては，相互独立性の低さではなく，相互協調性の高さが，感情同定困難の高さと関連し，身体感覚弁別の明瞭性，感情認識弁別の明瞭性に影響する可能性が示唆された。

(Masato KANAI, Shintaro YUKAWA)